海を渡る白楽天

――海龍教化説をめぐって――

大島　薫

はじめに

『撰集抄』巻八「第七、楽天詩」は、白楽天が江州に左遷される途次を描いた一話である。

むかし、唐国の白楽天、言のすなをすぎたるによって、尋陽の江のほとりに遷され侍りけるに、

官途自此心長別　世事従今口不言

と作り給へりければ、海龍、海の面にうかびて、泪をながして、大なる声して、「あはれ世のすなほならましかば」、とて波に入侍りけり。げにも、にごらむ君にてましまさば、さこそ、寵愛も侍べきに、あまつさへ、左遷に行はれ侍る事、唐国も無下に心おとりしてこそ、覚侍れ

（『撰集抄――校本篇――』〈笠間叢書一三九、一九七九年〉所収の松平文庫本による。引用するにあたって、わたくしに濁点を施したほか、破線部「日」とあるところ、他本により「口」に改めた）

白楽天の江州左遷は「琵琶引」（『白氏文集』巻第十三所収）とともに有名である。右に引用した『撰集抄』所収話も、「琵琶引」の冒頭に

尋陽江頭（ノ　ほとり）　夜送（レ　ル）客

（『白氏文集　金沢文庫本　大東急文庫蔵』〈勉誠社、一九八三年〉による）

とあることに基づいて、その左遷先を「尋陽の江のほとり」と記している。ただし、『和漢朗詠集』下巻「閑居」にも採られる「官途自此心長別　世事従今口不言」句は、江州に赴任するにあたって詠

じられたのでない。『白氏文集』巻第十六に所収される七言詩「重詩（香炉峯下、新卜二山居一、草堂初成。偶題二東壁一）」の一節であり、『和漢朗詠集』所収句にも「香炉峯下新卜二山居一」の詩題が付される。また『和漢朗詠集』の諸注釈書にも、たとえば、黒木文庫本『和漢朗詠註抄』に

文集十六云、香炉峯下（フレトヽ）新卜山居一、草堂初成偶（ナリタリ）題東壁（ヘキ）　五首之中第五詩也。文詳。

（『和漢朗詠集古注釈集成』第一巻、大学堂書店、一九九七年）

とあるなど、香炉峯下の草堂における詠詩であるむね記される。『撰集抄』巻八には「第八、北野御事」「第九、直幹事」ほか、罪なくして左遷された人物が詩文によせて語られる。醍醐寺蔵『新楽府略意』（寛喜二年写本）の地蔵院深賢の識語に、

楽天之志己達深理大聖誠言也

（太田次男氏「釈信救とその著作について—附・新楽府略意二種の翻印—」『斯道文庫研究』五、一九六六年七月）

と讃仰されることを踏まえれば、「官途自此心長別　世事従今口不言」句が、江州左遷によせて語られる所以も想起されよう。東大寺蔵『普通唱導集』中巻末「祖師」には「龍猛菩薩　龍智阿闍梨　金剛智三蔵　善無畏三蔵　一行阿闍梨　不空三蔵　恵果和尚　弘法大師　聖宝僧正　上宮太子　伝教大師　慈覚大師　智証大師　慈恵大師　或称大師　善導和尚　法然上人　布袋和尚　達磨大師　智者大師」に続いて「孔子　老子　顔回　白楽天　人麿　亡親等」が挙がる。こういった白楽天尊崇には、『撰集抄』所収話に「げにも、にごらむ君にてましまさば、さこそ、寵愛も侍べきに、あまつさへ、左遷に行はれ侍る事、唐国も無下に心おとりしてこそ、覚侍れ」とある意図も知られよう。唐土の聖人として、白楽天の「偽伝」が形成されていたことを伝えている。

ところで本話には、白楽天が「官途自此心長別　世事従今口不言」句を詠じたところ、海龍が出現したとある。長安を出発した白楽天は秦嶺を越え、商州を通り漢水の上流に出て、漢水に沿って下り、襄陽に行き、ここから舟行となって漢水を下り、鄂州など経て、大江に出て、これを下って江州に至ったという（布目潮風氏「白楽天の官吏生活—江州司馬時代—」『立命館文学』一八〇、一九六〇年三月）。江州へ赴任する行程に、海龍の登場を連想させるような、海路を行く舟行はない。白楽天は聖人たるに留まらず、海路を行き、海龍と交渉する人物としても理解されていたのだろうか。小稿は、白楽天像の形成をめぐって、平安時代から中世にかけて数多く生成された「偽伝」の世界をかいま見るものである。

一、「白居易伝」

白楽天に関する「偽伝」は平安時代の中期から通行していた（太田次男氏「『政事要略』所引の白氏文集について」『史学』四五の四、一九七三年十月・同氏「金沢文庫保管古鈔本所引の白氏文集について（下）―「畫西方浄土記」を中心にして―」『金沢文庫研究』二三六、一九七六年一月）。『政事要略』巻第六十一「糺弾雑事」に、以下の「白居易伝」が引用される。

白居易伝云。白居易。字楽天。太原人也。或言。其先秦将武安君白起後也。父欽通建三云。兼解文章。。媵妾梁氏女。合巹之後。未レ幾有レ娠。先レ是梁氏夢。与二一大夫一対語親昵。共翫筆墨。。語曰。我是天帝之孫也。感二渠神恵一。来作二配疋一。今降二文星一。。擬レ為二兒息一。梁氏既而懐孕。静二居一室一。心執二端直一。十一月間。披レ経閲レ伝。誕生之時。忽聞二鐘鼓之楽徒一天降来。鏗鏘之響徹二於屋宇一。如レ是之事。孔是奇詭。太暦四年歳也。次辛亥春二月十七日。生二于新昌坊舎一。然則准二據奇異之非一レ一。故名二白居易一。而字二楽天一也。楽天未□言。試指二之二字一能不レ誤レ語。六歳識二声韻一。十五□□賦。二十七挙二進士一。抜二萃甲科一。会昌五年歳次乙丑冬十月十五日卒。于レ時年七十五。生二太暦一卒二於会昌一。天子遣ト二中使一択中取二百余帖策子一。皆是諸子百家秘要抄注也。就レ中有ト楽天藁草詩書等未レ出レ世者上也。言二天下之事一。得失分明矣。羅二於紅牋之中一。点二於青簡之上一。或曰。古則宝応菩薩下二池世間一。号曰二伏犠一。吉祥菩薩為二女媧一。中葉則摩訶迦葉為二老子一。儒童菩薩為二孔丘一。今時文殊師利菩薩為二楽天一。又曰。歳星為二曼倩一。文曲星為二楽天一焉

（『新訂増補国史大系』による）

『本朝麗藻』巻下所収の高階積善の「夢中同謁白太保・元相公」詩には「高情不レ識又何神」句の自注に「白太保伝云、太保者是文曲星神云々」とあり、醍醐寺蔵『新楽府略意』巻上の冒頭にも「別伝曰」以下「其母懐妊、身心安楽也。故云二居易一。同伝曰、文曲星降為居易」とみえる。成簣堂文庫蔵『作文大体』に引用される源通親の「擬香山模草堂記」にも、「文曲星之化身」であることを伝えた「白楽天之伝」を、少年時代に読んだと記される。

白氏将案レ彰、文星化入レ夢、惕覚感二霊威一、粛潔供二茶菓一、少年読二白楽天之伝一、其身為二文曲星之化一、今又憶二夢中之子細一、弥抽二掌上之丁寧一

（品川和子氏「擬香山模草堂記について」『王朝文学論考』武蔵野書院、二〇〇〇年）

藤原頼長の『台記』康治二（一一四三）年九月三十日条には、修学書目の一つに「居易別伝一巻首付」が挙がり、白楽天の「偽伝」が

〈幼学書〉の一つであったことを推察させる。東北大学蔵『和漢朗詠註抄』巻上「立春」所収「柳無気力条先動　池有波文氷尽開」句の作者注にも

白居易、白姓、名居易也。文曲星化身也。母夢　文曲星従天下入於母口。其後有　身生人也。白居易伝云、有天竺沙門名摩獲。智行具足　為人所仰、年　看楽天、敬愛　慇懃。欲別之時把楽天手、相語曰、君是金剛利菩薩之変化也云々。金剛利菩薩是文殊也。又云、上古則宝応菩薩下化世間、号伏犠。吉祥菩薩為女媧、中葉則迦葉菩薩為老子、儒童菩薩為孔丘、今時、文殊師利菩薩　化　為楽天。文

とある。聖人の「伝記」に、誕生に際する奇瑞が加えられるように、文才を守護する文曲星の化身として、白楽天が誕生したことを伝えている。こういった「偽伝」が中国において形成されていたかどうかは確認していない。しかし、白詩を抄出さらには注釈した文献に、作者白楽天の「偽伝」が加えられたとしても不思議ではない。白詩を尊重するために、いわば白詩受容と関わる「偽伝」が形成されたと推考する。後藤昭雄氏は、このほかにも、安居院において編纂された『言泉集』「亡子因縁」の「賢者哭子事」に「白楽天伝」が引用されることなど挙げて、平安朝中期から鎌倉時代にかけて数種の白居易の伝が存在したことを指摘する（「金剛寺蔵新楽府注」『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館、一九九三年）。『言泉集』に引用された「白楽天伝」は、老いてもうけた愛子「生遅」が会昌四年の乱に出征して戦死したことを伝える。もちろんこれも「偽伝」だが、白楽天が老いて子をもうけ、その子を亡くしたことを伝える「偽伝」も、子を亡くした親の悲しみを語る因縁として、神奈川県立金沢文庫に数帖保管されている（西岡芳文氏「金沢文庫と白氏文集」『白居易研究講座』四、勉誠社、一九九四年）。ただし、文曲星の化身として誕生したことを伝える白楽天の「偽伝」からは連想できない内容であり、白楽天の一生を描いた一連の「伝記」の一部であるとは考え難い。白楽天の場合、詩文を注釈するに当たって、さまざまな「偽伝」が個々に形成された可能性もあろう。

先に引用した「白居易伝」には、文曲星の化身であるだけでなく、文殊菩薩の化現であるとも記される。天竺沙門摩獲が白楽天の手をとって語ったというのである。文曲星が文才を守護する主星であるように、文殊菩薩も「智恵」ゆえに、白楽天の本性とみなされたのだろう。白楽天を文殊菩薩の化現とみなす理解は、たとえば『今鏡』「打聞第十、つくり物がたりのゆくゑ」に次のように示される。

この世のことだに知りがたく侍れど、唐土に白楽天ともうしける人は、七十の巻物を作りて、ことばをいろへ、たとひをとりて、人の心をすゝめ給へりなど聞え給も、文殊の化身とこそは

申めれ。仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出し給て、説き置き給へるは、こと虚妄ならずとこそは侍れ

『拾玉集』第二「詠百首和歌（文集百首）」の跋文に「楽天者文殊之化身也」とあるほか、『十訓抄』第七「可専思慮事」にも「楽天又文殊ノ化身ナレハ、イカヽ信□サレム」とある。白楽天の文殊化現説は「白居易伝」の享受と離れて、ひろく通行している。『和漢朗詠集』巻下「仏事」に採られる「願以今生世俗文字之業狂言綺語誤　飜為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」句（『白氏文集』巻第七十所収「香山寺白氏洛中集記」）、あるいは『白氏文集』巻第七十「六讃偈并序」の序文にも「楽天常有願願以今生世俗文筆之因　翻為来世讃仏乗転法輪之縁也」とあり、白楽天は自らの虚偽による文筆活動が、仏法を讃え導く機縁となることを願う。『和漢朗詠集』に採られたためか、「願以今生世俗文字之業狂言綺語誤　飜為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」句は『梁塵秘抄』巻第二「雑法文歌五十首」に、

狂言綺語の誤ちは、仏を讃むる種として、麁き言葉も如何なるも、第一義とかにぞ帰るなる

と歌われるなど、世俗における文筆すなわち文芸を、仏の教えに導く言説と捉え直した文言として多用されている。白楽天を文殊の化現とみなせば、白詩は菩薩の言葉である。文芸の中でも「作り物語」作者の罪は重い。たとえば『宝物集』浄土十二門開示第三「持戒」の第五「妄語」に

紫式部が虚言をもって源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、人の夢にみえたりけりとて、歌よみどものよりあひて、一日経かきて、供養しける

とあるように、紫式部は虚偽を綴った『源氏物語』の作者ゆえに地獄に堕ちたという。有名な紫式部堕地獄説話である。先に引用した『今鏡』「打聞第十、つくり物がたりのゆくゑ」に、「作り物語」作者の罪を、白楽天が文殊の化現であることを示して救うのも、「願以今生世俗文字之業狂言綺語誤　飜為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」句の享受に照らせば偶然ではない。文曲星の化身というより、白楽天が文殊の化現と周知された所以を推定させる。

二、文殊海龍教化説

白楽天が文殊と化現と理解されていたのであれば、海龍と交渉する白楽天像を形成し得る。次に引用する『法華経』「提婆達多品」に明かされるように、文殊菩薩は、海龍を含む海の衆生に仏の教えを伝えた、すなわち「於海教化」の事績で知られる。

智積菩薩。問文殊菩薩。仁往龍宮。所化衆生。其数幾何。文殊師利言。其数無量。不可称計。非口所宣。非心所測。且待須臾。

自当有証。所言未竟。無数菩薩。坐宝蓮華。従海涌出。詣霊鷲山。住在虚空。此諸菩薩。皆是文殊師利。之所化度。具菩薩行。皆共論説。六波羅蜜。本声聞人。在虚空中。説声聞行。今皆修行。大乗空義。文殊師利。謂智積曰。於海教化。其事如此（中略）文殊師利言。我於海中。唯常宣説。妙法華経

文殊菩薩の「於海教化」は、義科に「文殊入海」の論題をもって〈論義〉もされた。文殊が法華の会座を立って入海した時節を問うものである。冒頭に引用した『撰集抄』巻八所収話に、白楽天の左遷を知った海龍が「海の面にうかびて、泪をながして、大なる声して」嘆いたとあるのは、海龍を教化したもうた文殊が白楽天の本性であるからであった。白楽天を文殊の化現とみなす「偽伝」は、白詩を尊重するために「智恵」の菩薩を本性としたというだけでなく、ひろく文殊の事績を被う内容であったのかもしれない。

そこで次に、文殊の「於海教化」を明かした『法華経』「提婆達多品」が、いかに読み解かれていたか確認したい。次に引用するのは、安居院澄憲（一一二六―一二〇三）が講説した〈経釈〉の一節である（拙稿「安居院澄憲草『法華経品釈』管見」『金沢文庫研究』三〇〇、一九九九年三月）。

次、文殊通経龍女作仏者、為一大事因縁。三周正説事已終、大聖趣海中一、流通妙法教化衆生給。

然、極厭非悪趣、極欣非上二、唯欲界人天、仏出世現感云、三悪道罪重根鈍処、極悪不善境。

実、従非大聖文殊利生方便如来在世妙益、有海中衆生争見仏聞法□悟得脱哉。

故、平等一子慈悲、深徹八万由旬底、普現三昧利益、普及三百万里城。

凡、内海外海尽、無軽済度砌。

所以、蓬莱方丈外仙棲、崑崙瀛洲延齢砌。

服不死薬、徒招千秋遐齢、嗽長生□、虚遊万年寿域。

増寿入易事、敢無出離生死思。海漫々直下見下無底、雲波最心細処也。乃至、我朝有吹上浜和歌浦申処、天下無双地、日域奇異処也。蒼波路遠雲懸千里。往還客見之養眼、遊宴輩聞之動心。

所以、海茫々至雲路境、

風浩々催波動静。

青蘿懸巌肩、嘲唐画屏風、

白雲廻山腰、嫉広隆山水。

依之、作文家鳴硯、二四不同句費心、

風月輩染筆、詠卅一字和歌。

此等海際皆、如来在世往、一乗流通当初、大聖文殊于塡大王一善功方便心、同済度有情恩、張八教網、下生死海、済龍畜輩、置菩提岸。給処也。

然、我於海中語、普雖亘権実半満、唯常宣説文、暫忘海化本意。

所以、万里蒼海上帆、調本聲聞人機、千里波浪指棹、誘菩提サタ行給。

而間、始沙伽羅龍王娘年始八才少女、円頓信解内薫、聞経功徳外顕。海化衆会、其数幾何

〈経釈〉とは、法会における一連の所作のうち、経典の解釈を講説するものである。右に引用したのは、法華三十講などで講じられた、『法華経』廿八品ならびに『無量義経』『観普賢菩薩行法経』（開結二経）を一品ごとに釈する「品釈」である（拙稿『花文集』解題」『法華経古注釈集』、臨川書店、二〇〇〇年）。『法華経』「提婆達多品」に明かされない、文殊が法華の会座を立って入海した時節（義科の論題「文殊入海」に問われる）を、妙楽大師湛然の説（「三周之後文殊方始入レ海教化義亦未レ失」）に基づいて「三周ノ正説事已に終ワリテ、大聖文殊海中ニ趣キテ、妙法ヲ流通シ衆生ヲ教化シ給ヒキ」と説くほか、「此等ノ海際」の情景を表現豊かに描写するなど、経典の訓読あるいは語釈に止まらない、〈経釈〉の世界がかいま見える。文殊が于塡大王とともに「於海教化」をなしたことも講じられる。〈賦経（経文読誦）〉との相違や〈論義〉との接点など確認され、法会における一連の所作の中で〈経釈〉が果たした役割を指摘できよう。

文殊が「於海教化」のために渡海する「此等ノ海際」の情景を、澄憲は「蓬莱方丈ハ外仙ノ棲、崑崙瀛洲ハ延齢ノ砌」以下に描写した。三神山の「蓬莱・方丈・瀛洲」に「崑崙」を加えて、海上の仙境を連想させ、破線を施した「海漫々トシテ直下ト見下スモ底モ無ク、雲ノ波ニモ最心細キ処也」には、白詩の中でも有名な「海漫々」（『白氏文集』巻第三所収）の詩句を用いる。「海漫々」詩は、海辺を描写する常套表現だが、醍醐寺に蔵される『新楽府略意』（信救作）の巻上に

海漫々戒求仙者、海中有三仙山、其名云蓬莱方丈瀛洲、不死薬生其山、服者長生不老也。秦始皇漢武帝赴　方士之勧、以童男卯女数千人入海中令求蓬莱、遂不得致、寔雖有三仙山自非仙骨者不可□、故戒之

（太田次男氏「釈信救とその著作について—附・新楽府略意二種の翻印—」、『斯道文庫論集』五、一九六六年七月）

とあるように、秦始皇や漢武帝が不老不死の薬を求めて蓬莱山へ使

者を遣わした故事を題材とする。『栄華物語』巻第二十三「こまくらべの行幸」に

海龍王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ

とあるほか、海龍王宮は海中の仙境として描かれる。海上の仙境へ渡海する情景を作文した「海漫々」の詩句を、文殊が渡海する「此等ノ海際」の情景を描写するために用いたのは偶然ではないだろう。

白詩の利用は「海漫々」詩だけでない。「此等ノ海際」が筆舌に尽くし難い情景であることを表現した、次の箇所（破線部）にも用いられる。

青蘿懸巖肩、嘲唐画屏風、
白雲廻山腰、嫉広隆山水。

「青蘿巖肩懸」「白雲山腰廻」の両句は、『白氏文集』に確認できない。しかし、白楽天作と仮託された『仲文章』には「学業篇第二」に次のようにある。

白雲帯風不離山腰、辟蘿懸巖不絶於松枝

（『諸本集成仲文章注解』、勉誠社、一九九三年）

『仲文章』は、白詩の撰集として享受されてもいる（黒田彰氏「金玉要集と仲文章―所引「白居易詞」をめぐって―」『中世説話の文学史的環境続』、和泉書院、一九九五年）。内閣文庫蔵『金玉要集』「養父事」末尾に、

唐ノ白楽天、明州ノ津ニテ云、
青苔似衣、岩面ノ肩ニ懸レリ　白雲似帯、山ノ腰ヲ廻レリ
住吉明神ノ云、老翁ニ反云、
苔衣キタルユワヲハ帯ヲセテ衣キン山ノヲヒヲスルカナ

と記されるほか、『金玉要集』に書き留められた白楽天の詠詩は、能の《白楽天》や世阿弥の『金島書』「若州」（後述）にも、白楽天が海辺を詠じた詩句として挙がる。「青蘿巖肩懸」「白雲山腰廻」の両句は偽作であるが、白楽天の海辺詠に依拠したものと認識されたに違いない。文殊が渡海した「此等ノ海際」の情景を描写するために、文殊の化現とみなされた白楽天の詩文が用いられたのである。

『魚山私鈔』所収の「文殊」に、

古云此賛、清涼山讃云也。其故白楽天文殊奉嘆徳作之清涼山進云云。依之云而也

と注記されるように、「文殊讃」が白楽天作と仮託されてきたのも同様、白楽天の詩文は文殊の言説そのものである。白楽天を文殊の化現とみなす「偽伝」の拡がりは、澄憲が草した「提婆達多品」釈において、文殊菩薩の「於海教化」にも及んでいたと考える。

もちろん、先にみた「海漫々」詩に限らず、白詩を用いた作文は珍しくなく、澄憲の白詩利用も確認されている（小峯和明氏「願文・表白を中心に」『白居易研究講座』四、勉誠社、一九九四年）。しか

し、澄憲が意識的に白詩（偽作を含む）を多用して「此等ノ海際」を描写したことは、白楽天のほかにも、文殊と関わる人物の詩文が利用されていることに指摘できよう。傍線を施した「蒼波路遠雲懸千里。往還客見之養眼、遊宴輩聞之動心。」には、『和漢朗詠集』巻下「行旅」に採られる橘直幹の「蒼波路遠雲千里　白霧山深鳥一声」句が用いられる。「蒼波路遠雲千里　白霧山深鳥一声」句は、『江談抄』第四に、

> 奇然入唐以件句称己作、以雲為霞以鳥為虫。唐人称云、可謂佳句、恐可作雲鳥。
>
> （『類聚本系江談抄注解』、武蔵野書院、一九八三年）

とあるほか、『和漢朗詠集』の諸注釈書にも奇然上人の入唐説話とともに伝えられる。奇然が文殊示現の霊地と知られる五台山に巡礼したことは有名であり、『梁塵秘抄』巻第二「仏歌十二首」にも次のように歌われる。

> 文殊は誰か迎へ来し、奇然聖こそは迎へしか　迎へしかや、伴には優塡国の王や大聖老人　善財童子に仏陀波利、さて十六羅漢諸天衆

奇然も、文殊の渡海に連想される人物であった。澄憲が「蒼波路遠雲千里」句と白詩を用いて作文したのは常套表現であったからではない。白詩を利用したのは、文殊の事績を白楽天に重ねて表現するための趣向であったと考える。

三、渡海文殊

渡海する文殊を描いた図像がある。獅子に乗った文殊が描かれ、童子・馭者・老人・僧侶の四人を侍者に伴う「五尊図」、童子と馭者を伴う「三尊図」など、いくつかの様式がある。前章に引用した『梁塵秘抄』巻第二「仏歌十二首」に収載された一首も、渡海文殊を題材とする（「伴には優塡国の王や大聖老人　善財童子に仏陀波利、さて十六羅漢諸天衆」とある）。『梁塵秘抄』歌は「文殊は誰か迎へ来し、奇然聖こそは迎へしか　迎へしかや」とあるから、文殊は日本の衆生を救うために渡海したことになる。澄憲の〈経釈〉には、文殊が于塡大王とともに「於海教化」をなしたと講説されるが、于塡大王は文殊の馭者として渡海文殊の図像に描かれる（高瀬多聞氏「文殊五尊図像に関するいくつかの問題」『美術史研究』二八、一九八九年一二月）。侍者を伴なった文殊の騎獅図は、太山寺蔵『法華経（一品経）』（伝平氏各筆）「妙荘厳王本事品」ならびに長谷寺蔵『法華経（一品経）』「安楽行品」の見返絵に描かれるなど、法華経変相の一つではあるが、「提婆達多品」に明かされた「於海教化」を視覚化したと積極的に認めることはできない。澄憲は「提婆達多品」に詳細でない「於海教化」を講説するに当たって、視覚

化された図像に基づいて、獅子に乗る文殊と獅子の手綱をとる于塡大王が海を渡る情景を連想したのではないだろうか。

『古今著門集』巻第四文学「第五、大江朝綱、夢中に白楽天と問答の事」には次のようにある。

天暦六年十月十八日、後の江相公の夢に、白楽天来たり給へりけり。相公悦びてあひたてまつりて、そのかたちを見れば、白衣を着給ひたり。面の色あかぐろにおはしける。青きもの着たる者四人あひたがひたり。相公「都率天より来たり給へるか」と問ひたてまつられければ、「しかなり」とぞ答へ給ひたりける。申すべきことありて来たれるよしのたまひけるに、いまだ物語におよばずして夢さめにければ、口惜しき事かぎりなかりけり

朝綱の夢に現れた白楽天は四人の侍者を従える。本話に登場する四人の侍者は、教王護国寺旧蔵（京都国立博物館所蔵）『山水屏風』に描かれた、白楽天を草堂に訪問する四人と共通すると指摘されている（大串純夫氏「人麿像の成立と東寺山水屏風」『美術研究』一六四、一九五八年一月）。しかし、本話は「文学」の項に収載される。「智恵」の文殊を本性とする、白楽天の「偽伝」が投影されても不思議ではない。四人の侍者は、渡海文殊の図像（「文殊五尊図」）に描かれる四人から連想されたと考える。「都率天より来たり給へるか」という文言に、文芸に携わる人物の堕地獄も救われよう。白楽天を文殊の化現とみなす「偽伝」は、渡海する文殊像にも及んで、新たな白楽天像を形成する。「海を渡る白楽天」像である。

世阿弥作の小謡集『金島書』のうち「若州」も同様である。『金島書』は、配所へ向かう道行「若州」にはじまり、佐渡の風物など綴った日次記的小謡集だが、世阿弥が佐渡に流されたことを伝える伝記資料とも位置付けられる。

永享六年五月四日、みやこをいて、次日、若州をはまと云とまりにつきぬ、ここは、先年もみたりし処なれとも、いまは、らうもうなれは、さたかならず、見れば、ゑ〻めくり〳〵て、いその山、なみの雲とつらなって、つたへきく、もろこしのゑんほのきはんとやらんも、かくこそ、おもひ出られて、「船とむる、つたの入うみ、見わたせは」〳〵、五月もはやく、たちはなの、むかしこそ、身のわかさ路とみえしものを、いまは老の後せ山、され共、末はみとりにて、木ふかき木すゑは、けしきたつ、あを葉の山の夏陰の、うみのにはひうつろひて、さすやうしほも、青浪の、さもそこひなき、みきは哉〳〵、「せいたい衣をひて、いわをのかたにかゝり、はくうん帯に似て、山のこしをまはる」と、はくらくてんかなかめける、ひかしの船、西のふね、いて入る月に、かけふかき、しんやうのゑのほとり、

かくやと、おもひしられたり

（吉田東伍氏『世阿弥十六部集』、磯部甲陽堂、一九〇九年）

若狭の浜で眺めた情景が謡われ、若狭から船出して、海路を佐渡に向かったことを予見させる。傍線を施した「ひかしの船、西のふね、いて入る月に、かけふかき、しんやうのゑのほとり、かくやと、おもひしられたり」は「琵琶引」の

東船西舫悄　無レ言
唯見江心秋月白

に基づき、波線を施した「ゑ、めくり〳〵て」も『白氏文集』巻第十五「望二江州一」に拠る。「若州」は、白楽天の江州左遷を踏まえて構想されたに違いない。前章に取り上げた、白楽天偽作の海辺詠「せいたい衣をひて、いわをのかたにかゝり、はくうん帯に似て、山のこしをまはる」も加えて、世阿弥は罪無くして佐渡へ流される我が身を、海路を江州へ向かう「海を渡る白楽天」像に準えたのである。

「於海教化」は海龍を含む海の衆生すなわち畜生への教化である。文殊の渡海は「於海教化」を含む、下化衆生の象徴であったろう。ただし、『金島書』の「若州」に、下化衆生のために渡海したことは読み取れない。能の《白楽天》は「日本の智恵を計れ」と宣旨を受けた白楽天（ワキ）が渡海する場面に始まり、辿り着いた筑紫の海辺で、住吉明神の化身の漁翁（シテ）と詩歌の応酬を行い、心あるる詠歌と、日本の和歌の徳を聞いて退散するまでが描かれる。「海を渡る白楽天」像を舞台化した一番である。しかし、この場合も、白楽天は日本の衆生を救うために渡海したわけではない。文殊化現説に基づきながらも、渡海する本来の意味とは関わらない、新たな「偽伝」が形成されたわけである。能の《白楽天》あるいは『金島書』の「若州」に踏まえられた「海を渡る白楽天」像は、文殊を本性とする一連の「伝記」において形成されたのではない。白楽天の「偽伝」は、文殊の事績を一つ一つ投影させつつ、個々に形成されたのであろう。能の《白楽天》は、中国の漢詩に日本の和歌を対する、慈円の『拾玉集』第二「詠百首和歌（文集百首）」に、白詩を題材とする百首歌の後に「から国やことのは風の吹くなればよせてぞかへす和歌のうら波」歌を加え、

楽天者文殊之化身也、当和彼漢字。和歌者神国之風俗也。須述此早懐。因茲忽翫百句之玉章。愁綴百首之拙什。法楽是北野之社。祈願彼南無之誠。定翻今生世俗文字之業、為当来讃仏法輪之縁者歟

と跋文を記すことなど想起させる、興味深い内容である。が、これについては、別稿に述べることにしたい。

もに「げにも、にごらむ君にてましまさば、さこそ、寵愛も侍べきに、あまつさへ、左遷に行はれ侍る事、唐国も無下に心おとりしてこそ、覚侍れ」と加えられることには、白楽天を聖人とする「偽伝」が形成されていたというより、いかなる衆生も救済するために、自ら「貧窮孤独苦悩衆生」と化して立ち現れる文殊の姿を読み取るべきかもしれない。

ところで、先に取り上げたように、安居院澄憲が『法華経』「提婆達多品」を講説した〈品釈〉には、文殊の「於海教化」が、説話的な要素を含んだ、豊かな表現を用いて説き明かされる。「於海教化」は「提婆達多品」に詳細でなく、これをいかに講じ、説き明かすかが、講師の面目であったことを推定させる。澄憲は、説法第一で知られる富樓那尊者の再誕であると称せられた、〈説法〉の上手であった。文殊の「於海教化」を白詩を用いて表現したのは、白楽天を文殊の化現とみなした「偽伝」に発想した、澄憲の趣向である。白楽天の「偽伝」が、文殊化現説に基づいた一連の「伝記」として存在したのでなく、文殊の事績を一つ一つ投影させつつ、個々に形成されたものであることも先に述べた。澄憲は『法華経』「提婆達多品」を講説するに当たって、文殊の「於海教化」を説き明かすために、白楽天像を重ねたのである。『法華経』講説の場、さらに言えば、法会をはじめとする様々な〈説法〉の場が、新たな「偽伝」

むすびにかえて

冒頭に取り上げた『撰集抄』巻八「第七、楽天詩」は、白楽天の文殊化現説に基づいて、『法華経』「提婆達多品」に明かされる「於海教化」と渡海文殊の図像を投影した、白楽天像を伝えている。堀池春峰氏は、文殊菩薩が「学解・智恵」において信仰されただけでなく、南都における文殊会では『文殊師利般涅槃経』の「若有人念。若欲供養修福業者。即自化身。作貧窮孤独苦悩衆生。至行者前。若有人念文殊師利者。当行慈心。行慈心者是得見文殊師利」に基づいた「窮民救済」において信仰されていたことを指摘する（「南都仏教と文殊信仰」『南都仏教史の研究』、法蔵館、一九八二年）。『撰集抄』巻三「第七、瞻西聖人事」など、文殊が「貧窮孤独苦悩」の姿で化現し施を乞う話は、後者の文殊信仰が前提となる（南里みち子氏「文殊化現の説話」『福岡女子短大紀要』二九、一九八五年六月）。西大寺流の文殊信仰が民衆を対象とする「窮民救済」だけでなく「死者追善」をも行う、いわば現世と来世を救済するものであったことも指摘されている（内田啓一氏「西大寺叡尊及び西大寺流の文殊信仰とその造形」『美術史研究』二六、一九八八年十二月）。西大寺流の真言律宗の伝播とともに、こういった文殊信仰が拡がっていったことも間違いない。『撰集抄』巻八所収話に、海龍の嘆きとと

を形成する場であったことを指摘するとともに、白楽天と「於海教化」を結び付け、新たな白楽天像を形成したのが、ほかならぬ澄憲であったことをも推定し得るのではないだろうか。

先に取り上げた『言泉集』ほか、澄憲の〈説法〉を記録するとともに、安居院が所持した「説法詞」を伝える文献は数多い。そういった文献に書き留められた「詞」が、同時期における文芸世界を髣髴させるような、興味深い趣向をもって綴られていることも周知である。法会をはじめとする様々な〈説法〉の場において表白された「詞」は、先に引用した〈経釈〉に限らず、〈表白〉〈施主段〉など、いずれも文芸的素養をもって作文されている。『法華経』講説の場において、新たな解釈を加えた白楽天の「偽伝」が形成されたように、〈説法〉の場では、文芸世界と表裏一体をなして作文された「詞」が表白されていた。その豊饒な表現世界を読み解くことは、本来明かされるべき仏教学的な意味を知るばかりでなく、文芸の形成を考える上にも重要である。小稿は、白楽天の「偽伝」が形成された経緯に、その一端をかいま見る。ただし、美辞麗句を鏤め、文芸的要素を多分に含んだ「説法詞」は、澄憲によって発案されたわけではない。澄憲以前すなわち安居院流以前の「説法詞」においても同様であった。澄憲以前、〈説法〉は、法会における一連の所作ではあるが、修法や読経あるいは〈論義〉とは異なって位置付けられていた（拙稿「安居院澄憲の〈説法道〉―承安四年宮中最勝講における勧賞をめぐって―」『仏教文学』二四、二〇〇〇年）。『和漢朗詠集』に採られた「願以今生世俗文字之業狂言綺語誤　飜為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁」句の意味するところは、「讃仏乗之因転法輪之縁」を「今生世俗文学之業狂言綺語誤」をもって講説し表白する、まさに〈説法〉そのものが内包する問題として意識されていたのではないだろうか。

（付記）本稿は、平成十二年度文学部共同研究における研究成果の一部である。

（おおしま　かおる／本学助教授）